

地域おこし協力隊通信 (No. 45) 素敵な夏だ (知史)

種子島に来て初めての夏。仲良くなった方にバーベキューへ招かれた。どこでやるのか、何を持って行ったらいいかも分からない。迎えに来てもらった車の運転者は、見知らぬ方だ。会場のお宅に着く。誰の家なんだろう。

申し訳程度に持参したお酒を冷やしたいと伝える。指差されたクーラーボックスを開けると、目を疑う量の飲み物。そのカラフルな中身に、持参した缶で彩りを加える。そつと閉めて、準備のお手伝いをお願いします。台所では瞬く間に何人分もの料理が出来ていく。もつぱら家事下手な僕は、それらにラップを掛ける。マカロニサラダが美味しそうだ。

ご主人は生地からピザを作る。時間があれば耐火レンガを組み立て、釜から用意するらしい。「今日は電気だけで許してね」と破顔するご主人とは、さつきはじめまでの挨拶をしたばかりだ。

自家栽培のバジルを載せたピザは、香りがごちゃごちゃしないよいう白ナスとチーズしか具材を載せないらしい。バジルに触れた手から、清涼感ある香りが身体を巡る。外では赤々とした炭が燃え、辺りの空気を揺らめかせる。夕方六時でも昼みたいに明るい庭では、

サトウキビがざわざわと奏でる音が聞こえてくる。暑いのに、心地良い。

一行が揃う前に、「練習」の乾杯が始まる。ひとりの女性が、「外で飲むとなんでこんなに美味しいんだろう」と言う。分かります。僕も言おうとしたから。

参加者が少しずつ増える。紐で括られた島乃泉も増える。参加者ひとり当たり二本ずつ増えるんじゃないだろうか。楽しくて美味しくて、僕も笑う。夜が更けても、話は尽きない。島外から来た僕たちを珍しがって、中種子町の良いところ、昔と変わってしまったところなんかを、教えてくれる。

こんな、『種子島では当たり前前の風景』が、移住者の僕にはきらめいて見える。

素敵な夏だ。

―湯目知史(ゆのめともふみ)―
地域おこし協力隊員。宮城県出身の作家・ライター。仙台の大学を卒業後、東京で就職。結婚後、妻と「地域に魅力的な仕事を創る」夢を叶えるため、退職して2020年4月に中種子町へ移住。

町の皆さんとお会いするなかで、よくいただく『地域おこし協力隊制度』や私達についての質問を、毎月少しずつ紹介したいと思います！

【第1回】『地域おこし協力隊』とは、なにものだろう？



地域おこし協力隊って、どんな制度？

都市部から地方へ、移住者を増やす取り組みの一つだよ



協力隊って国から派遣される人？役場から派遣される人？

実はどちらでもないんだよ。その地域が好きで、起業・定住を目指している移住者なんだ。
※雇用関係は自治体による。



地域おこし協力隊とは

- ① 地方定住を目指す人をサポートする制度
- ② 地域おこし活動しながら、起業・定住を目指す
- ③ 任期は最長3年間
- ④ 給料は平均16万前後

- ・前提として、「地方で暮らしたい」という人を応援する制度です。
- ・雇用期間が限られているので、任期後の起業・定住を意識した活動することが重要です。
- ・令和元年では1,071の自治体で5,503人の隊員が誕生しています。



イラスト：こっこ <https://coccoblog.org/cooperator-squad/>